森林レンジャーがゆく

尾根道整備

（89）

雑木林は、かつて里山として人の手によって維持されてきました。しかし、落ち葉利用や薪炭利用がなくなり、人の暮らしと森が切り離され、里山も放置されるようになりました。外から今の森を眺めると、たくさんの木々が生い茂り、豊かな自然のように見えます。コナラなどの広葉樹もほとんど利用されず、樹冠を大きく広げて育っています。しかし、ひとたび台風など強風にあおられると根返りで倒れたり、大きな枝が折れて落下したりと風倒木被害が発生しやすいもろく弱い森になっているのです。コナラを中心とした広葉樹林が残る菅生地域（尾根道周遊ハイキングコース）でも、昨年10月の台風により大きな被害を受けました。ひどい所は、丸太をくぐったり、乗り越えたりしないと歩けないほどの被害が出ている場所もありました。倒木（かかり木など）をそのままにしておくと、落枝事故などの危険があることに加え、迂回路としてできたコース外の道が森に負担をかける可能性もあります。そこで、このハイキングコースを利用するマウンテンバイクのグループが、ボランティアで危険木や倒木の処理に立ち上がりました。絡み合った倒木の枝は、パズルのように１本１本処理をしないと倒木が動いたり転がったり、枝がはねたりする危険があるため、難しい作業になります。これまでも森林整備を行ってきたメンバーがチェーンソーやノコギリなどを使い、手分けして倒木処理に挑みました。「森に負荷がかかること」や「森を安全に歩けない、走れないこと」を心配し、市内の方だけでなく、市外からもたくさんの方が集まりました。新たな形で人が森に入り、森を見守る仕組みができつつあるように感じました。

今回、ボランティアで倒木処理に参加された方、ありがとうございました。（杉野）